



# 建設の幻獣4 鬼 トツケビ

## 岩木山の鬼

青森県弘前市の岩木山は、漢字の「山」の字そのままの美しい姿から津軽富士と呼ばれて親しまれているとともに、霊峰として崇められてきました。3つに分かれた山頂は、南側から鳥海山、中央の主峰が岩木山、北が巖鬼山と名付けられ、中でも巖鬼山は赤倉山とも呼

ばれて、鬼神が住むとおそれられてきました。赤倉山の鬼神は、山人や大人とも呼ばれ、岩木山周辺には彼らに関する伝承が数多く残されています。その中でも東の麓にある鬼沢という集落では、赤倉山の鬼を大切な農業神として祀っています。なぜなら、その昔、田を拓くための灌漑用水路を、鬼が一夜にして造ったからだというのです。「弘藩明治一統誌」から伝説をご紹介します。



蓑笠を身に着けた鬼(当館職員 上原由子画)

「鬼沢が長根派と呼ばれていたところ、村に正直で温良な弥十郎という人がいた。ある日、弥十郎が山へ狩りにいくと山

人に出会った。それから時々行き会うちに友人になった。ある時、弥十郎は田を拓きたいと考え、山人に相談した。それから山人が開墾を手伝うようになり、数町の田を拓くことができた。しかし、水に恵まれなかったため、時々渇水してしまった。そのことを山人に云うと、一夜にして忽然と水が引かれ、田は潤った。山人は赤倉山の深い谷から大石を砕き、凸凹なところも水勢を引き延ばして田まで水を引いたのだ。このことがあつてから、鬼が引いた水路を逆水沢と云い、村の名前を長根派から鬼沢と変えた。しかし、弥十郎の妻が、山人が働く様子を盗み見ていたため、山人は開墾中に用いた蓑笠を弥十郎に授けて去っていた。そして山人が残した蓑笠は、堂社を造つて祀ることにした。これが鬼神社であり、今にいたるまで鬼神が栄えているのもこの因縁によるものだ」

鬼が引いた水路は「逆水堰」や「鬼神堰」とも呼ばれ、本誌2019春号「鬼沢の鬼神」(けんせつのでんせつ シリール58)で詳述していますので、当館ホームページから全文をご覧ください。**妙多羅天女** 新潟県西蒲原郡弥彦村の弥彦神社には、大工に後れをとった鍛冶屋の母が悪鬼と化したという話があり、民俗学者・谷川健一は著書『鍛冶屋の母』に、妻戸神社の神職の末裔・高橋吉雄の『弥彦山周辺の史跡と伝説』から左記のような伝説を引いています。

岩木山 漢字の「山」の字のような山容が特徴の霊峰 (青森県弘前市 2018年撮影)

つけて、悪行の限りをつくしたという」

この悪鬼と化した母親は、80年ほど後の保元元年(1156)に、典海大僧正の説教によって心を入れ替え、妙多羅天女と改まり、弥彦神社近傍の宝光院に祀られるようになったといひます。

## 韓国の鬼

韓国では、鬼とはこの世に恨みを残してさまよう死霊のことを言います。例えば、祭祀をしてくれる後継者のいない「無主鬼」、幼児のうちに命を落とした「太子鬼」、水難や火災で死んだ「水鬼」「火鬼」、飢え死にした「餓鬼」などです。高麗時代の高僧(1206~1289)が認めた『三國遺事』には、新羅の真智王(546~576)の亡霊と美女・桃花郎の間に産まれた息子・鼻荊が、鬼を使って石橋を架ける話があります。

「真智王は、淫蕩であり政治を乱したので、国の人々が王を廃したが、それより前に農夫の娘の桃花郎に目をつけたことがある。しかし、桃花郎は、夫があるため殺されても従わないと拒んだので、真智王は「夫がいなければいいのだな」と約束を取り付け、桃花郎を開放した。その年に、真智王は亡くなり、その三年後に桃花郎の夫も亡くなった。すると、夜中に生前の姿そのままに真智王が、桃花郎の部屋にやってきて、「夫がいなくなったからいいだろう」と夜をとともにするようになり、桃花郎は男の子を産んで鼻荊と名付けた。

真智王の跡を継いでいた真平王が、この不思議な話を聞きつけ、その子を宮中で養育し、15歳になった時、執事の職を

授けた。

ところが、鼻荊は毎夜、家を抜け出して遠くへ遊びに行くようになった。真平王は、勇士15人をして監視をさせると、いつも月城の上を飛び越えて荒川の岸の上で鬼の群れを率いて遊んでいた。この事を聞いた真平王は、鼻荊を召して問いただすと、間違いないという。それならば、鬼たちを使って神元寺の北の川に橋をかけてみると言うので、果たして鼻荊は鬼の群れを使って石を削り、一夜のうちに大きな橋をかけた。それで、その橋は鬼橋と名付けられた」

## 鬼橋

韓国の鬼は一夜の内に橋をかけましたが、日本の鬼も負けていません。『諸国里人談』の二には、日本の鬼も一夜にして橋を架けた話があります。

「備後国帝釈山の谷川に長さ二十間(約36m)、幅三間(約5.4m)の石で出来た反り橋がある。これを鬼橋という。神代の時代、梵天、帝釈天がそろって数万の眷属の鬼を連れて一夜の内に架けたという。この橋を渡ることが出来たならば浄土に至り、渡ることが出来ない者は地獄に落ちるといふ」

この伝説では、橋を渡ることができない者は地獄に落ちるとありますが、この他にも菩提心の無い者や、悪人は渡ることができないという橋の話があります。一例を挙げてみましょう。

「高野山の御厨の橋は、昔から罪障の深い者は、川に異形のもの浮かんで見えて渡ることができないという。豊臣秀吉は、この橋を渡れるか心配して、夜半

に人知れず一人の供を連れて試してみましたが、無事渡ることが出来た。それで翌日になって、皆の前大威張りで渡つてみせた」(『旅と伝説』昭和4年7月号)

## 鬼無里

「旅と伝説」創刊号には、長野県の「一夜山と鬼無里の由来譚」があります。「昔、今の一夜山があるあたりは、平らな土地だった。そこにある帝が都を造ろうと思いついた。あわてたのは、この山に住む鬼どもだ。この仙境に都など建てられてみる、第一俺たちの住む場所がなくなってしまう。なにかとつてもない邪魔をしなければならぬ。こうして、戸隠山と戸倉山との間に、一夜のうちに別の山を築き上げた。帝は都を造ることをあきらめ、その後、鬼どもは退治されてしまったので、一夜山がある村を鬼無里と呼ぶようになった」

## トツケビ

韓国の鬼は恨みを残して彷徨う死霊ですが、トツケビは妖怪であり千変万化で、神出鬼没。子ども、巨人、老人、美女などさまざまな姿であらわれます。また、民話に出てくるトツケビは、歌や踊りが好きで大食漢。意地悪でいたずら好きなくせに、妙に義理堅く、ときに優しく、ときに嫉妬深く、両義的で人間と同じような性格です。

トツケビは、陰鬱な環境で自然に生まれたり、古くなく道具に女性の経血がつく



婆々杉 悪鬼と化した鍛冶屋の婆は、この杉の根本で横たわっているところを典海大僧正に見つけた。弥彦神社近くの宝光院の奥にある(新潟県弥彦村 2012年撮影)

と変化するなどと言われています。そうしたトツケビたちが、人の役に立った話をご紹介します。

「忠清北道の清州には、チゲ岩の堰野(井堰を利用して農作業をする田)があり、数百石の広さだが、その井堰の修理にはお金がかかって仕方なかった。ところで、ある老人が野原で印鑑を見つけ、それを拾って持って帰った。するとその日の夕方、トツケビたちが何十人もやってきて、印鑑は自分たちの物なので返してくれという。そこで老人が、返してやるかわりに井堰を修理してくれと持ちかけた。そしてある日、トツケビたちが再びやってきて、井堰の壊れたところを全部修理するから印鑑を返して欲しいという。老人が確かめに行くくと、トツケビたちは砂をさつとかき集めて、子供がいたずらするように修理していた。こんなやつ仕事で大丈夫かと老人が聞くと、まったく心配いらないと言うので印鑑を返してやった。その後は、いくらか激しい雨になっても井堰はきれいなかったという」

(文：江口 文秀)